

# 「子どもの発達をみる」とは如何なる活動か？

- 「観察」と「診断」の実際から考える -

企 画： 平沼 博将（福山市立女子短期大学）  
藤野 友紀（北海道大学）  
司 会： 平沼 博将（福山市立女子短期大学）  
話題提供者： 石野 秀明（兵庫教育大学）  
藤野 友紀（北海道大学）  
指定討論者： 浜田寿美男（奈良女子大学）\* 非会員

## 〔企画趣旨〕

私たちは、さまざまな場面で、さまざまな立場（視点）から、子どもの発達をみている。しかし、「子どもの発達をみる（見る・観る・診る）」ということ自体をどのような活動として捉えるかについてはあまり議論されてこなかったように思う。

本企画では、子どもの発達を「観ること」（保育の場での参加観察）と子どもの発達を「診ること」（診断の場での課題場面）の2つの活動から、この問題にアプローチしてみたい。

## 〔話題提供1〕

### 石野秀明：「終わりなき活動：観察を通して子どもの発達をみる」

私は、保育園で6年間参加観察を行ってきた。今、目の前には膨大な記録が残され、到底尽くし切れぬ問いが横たわっている。実感として「子どもの発達をみる」ことは、とても複雑な活動だと思う。

たとえば7年前、修士論文での失敗を機に、私は子どもの姿を見よう、見ようとしていた。1~2歳児の振る舞いは、私の視線を超えていく感じがして毎日が新鮮だった。何よりも、保育の場で子どもたちと先生方と過ごす時間が変化に満ちていて楽しかった。しかし、家に帰って記録をつけて考えてみても、その意味が全然分からない。自分の無力さが感じられて、やりきれない思いだった。子どもたちの「名前」をめぐる出来事を通じて、1~2歳児を理解する手がかりを得たのは、それから6年後のことだった。そのとき、私は就職というかたちで、社会的に「名前」を刻んでいた。目の前には、1歳になろうとする我が子がいた。

子どもをみることは、観察者である私に眼差しを向けることでもある。今少し一般化すれば、保育の場で集う人々の生の力線の交叉点にこそ、子どもの発達を語る場所があるように思われる。未完結の力線を読み解いてゆく、この意味で「子どもの発達をみる」活動には終わりが無い。

## 〔話題提供2〕

### 藤野友紀：「課題をとおして発達をみることの可能性と限界」

「子どもをみる」「発達をみる」というときに、それは必ず実践に埋め込まれたかたちでしか有り得ない。たとえば、保育実践を行う保育者と発達診断を行う心理職では、同じ場面の同じ子どもを見ていても、見えていることはかなり異なっているだろう。なぜなら、両者にとって、子どもとの関係の結び方や歴史、その場面を取り巻く文脈、みる際のリソース、予期や期待の意味が異なっているからだ。つまり、「みる者」は独立して在るわけではなく、常に文脈の中に実践に埋め込まれて在る。ならば議論の前提として、「発達診断」を「生物学的知見や心理学的知見を合わせて、より科学的に正確に子どもの発達をみる」と想定するより、一つの実践であると考えた方が適当であると思われる。

今回の報告では、発達診断という実践の特徴を明らかにするために、発達診断で取り扱われることの多い課題場面の活動に焦点を当ててみたい。課題場面の具体的な分析をとおして、課題場面において子どもと検査者（診断者）がどのような文脈の中であって何に制約されているか、課題場面では何が暗黙の前提にされており実際には何が起きているか、検査者（診断者）と子どもがそれぞれ何を対象として活動しているのか、そこにはどのようなズレが起きているのか、そのなかで検査者（診断者）は何をリソースとして結果的に何をみているのかといった問題を、「伝達モデル」と「交渉モデル」をもちいて検討していく。